KAPPA NOVELS

長編推理小説

求婚の密室

笹沢左保

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　**求婚の密室**

昭和53年7月30日　初版1刷発行
昭和56年11月10日　12刷発行

定価600円

著者　笹沢左保
東京都小平市小川東町2028

発行者　大坪昌夫
印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録 116613
© Saho Sasazawa 1978
(分)0-2-93(製)02347(出)2271(0)
Printed in Japan

長編推理小説

求婚の密室

笹沢左保

カッパ・ノベルス

求婚の密室　目次

第一章　密室の死　5
第二章　心中説　63
第三章　他殺説　117
第四章　真犯人　167

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

■主な登場人物

天知昌二郎　36　ルポライター。
天知　春彦　5　昌二郎の長男。
西城　豊士　60　東都学院大学文学部教授。
西城　若子　54　豊士の妻。
西城富士子　27　豊士の長女。女優。
西城サツキ　6　豊士の次女。
石戸　昌也　35　医師。
小野里　実　34　弁護士。
綿貫　純夫　33　西城豊士の甥。
綿貫　澄江　29　純夫の妻。
浦上　礼美　22　東都学院大学学生。
前田　秀次　23　東都学院大学学生。礼美の恋人。
大河内洋介　51　東都学院大学医学部教授。
大河内昌子　38　洋介の妻。
進藤　信雄　44　東都学院大学。文学部助教授。
進藤季美子　39　信雄の妻。
沢田　真弓　30　西城豊士の元秘書。
内海　良平　55　別荘管理人。
内海　乙江　48　良平の妻。
田部井浩三　38　「婦人自身」編集長。

イラストレーション　金森達（かなもり とおる）

第一章　密室の死

1

赤坂の東洋ホテルの小宴会場『白銀の間』には、二百人からの男女が集まっていた。まだ乾杯もすんでいないので、私語も少なく、宴会場は静まり返っていた。正面の飾りつけの中に、『第一回ジャーナリスト大衆賞・受賞記念パーティ』の文字が見える。

その手前の壇上に、天知昌二郎は突っ立っていた。白の三つ揃いの背広の胸に、EPレコード盤ぐらいの大きさの赤いバラの花をつけて、天知昌二郎は目のやり場に困っていた。どうしても、怒ったような顔つきになる。

晴れの舞台といったものや、華やかな存在になることが、性格的に苦手である。背広が窮屈に感じられるし、二百人からの人々の視線が痛かった。天知昌二郎の彫りの深い顔が、いかにも苦しそうであった。

すぐ脇にあるマイクの前に、司会者と挨拶や祝辞をのべる人たちが次々に立つ。それに対して、天知昌二郎はいちいち頭を下げなければならない。挨拶や祝辞の内容は、まるで聞いていなかった。

「天知昌二郎、三十六歳。身長一メートル八十センチ、体重が七十四キロだそうでございます。四年前に奥さまを病気で亡くされてから、ずっと独身を続けております。ただし、春彦君という五歳の坊ちゃんがおられるので、子連れでございます。当人は大変モテるらしいんですが、再婚の意志はないそうで、一つ彼を一瞬にして陥落させるような女性の出現を、われわれは期待しているわけなんですが……」

「天知昌二郎には、だんまりのアマさん、あるいは鬼の天知といった異名がある。これらの異名は、若いライターの諸君が天知昌二郎を慕い、尊敬するが故に奉ったものと聞いている。しかし、天知昌二郎はライターの世界におけるボス的存在になることを嫌い、決して同業者の後輩たちの集まりに顔を出そうとしない。そうかと言って、一匹狼を気どっているわけでもない。天知昌二郎は、

横の連絡を密にしてあちこちに顔を売って歩くのは、ゴシップ記者のやることだと明言する。彼は常に、孤独な男なのです」

「天知さんはフリーのライターとして、常に第一人者の立場を維持されてこられました。正確な記事、重厚な内容、中立厳正な批評眼、真剣な取材態度、ヒューマニズムを世に訴えかけようとする使命感、現代感覚による巧みな文章と、この世界での信頼は厚く、われわれ後輩の励みとなってくれているのであります」

「署名原稿が多くなり、単なる名なしのルポ・ライターからジャーナリストとして、世の中に認められるようになったのは、天知昌二郎氏の存在によるものと、同業者の一員であるわたしなども、大いに感謝しているわけです」

「この度、新たにジャーナリスト大衆賞という功労賞が設けられたことを知ったとき、その第一回の受賞者は天知さんを除いてほかにないと、誰もが意見の一致を見たのです。結果はやはり、その通りでした。これほど、嬉しいことはございません」

「第一回ジャーナリスト大衆賞候補にノミネートされたのは天知昌二郎氏ただひとり、しかも天知氏の女性週刊誌〝婦人自身〟に連載中の〝シリーズ人生の標本〟と一般週刊誌〝週刊アントニム〟に連載中のエッセイ〝日本人再発見〟に授賞と、満票の三十三票によって決定を見たことは、いかにも第一回授賞に相応しい選考会だったと、三十三名の選考委員が喜びの拍手に沸いたものです」

このような挨拶と祝辞が延々と続き、最後に受賞者のお礼の言葉というのがあった。そこで天知昌二郎は、ありがとうございますと一言だけの挨拶を終えた。二百人の男女のあいだから、拍手と笑い声が起こった。

いかにも天知昌二郎らしいあっさりした挨拶であり、その照れ臭そうな顔と態度が何となく滑稽だったからである。会場は急に和んだ雰囲気になり、どよめきが広がって、人々はあちこちへと移動を始めた。

ボーイが一斉に散って、ビール、水割り、ジュースなどを配った。乾杯が行なわれたあとは、騒々しい立食パーティとなった。ジャーナリズム関係だけではなく、政・財界からの代理人、芸能人、写真家、画家、それに小説家なども姿を見せていた。

主催がジャーナリスト協会ということもあったし、天

知昌二郎の顔の広さもまたいろいろな世界の人々を集める力になっていたのだ。天知昌二郎は人波の中に分け入って、握手を繰り返すこととなった。

「どうも……」

寡黙な天知昌二郎は、そう言って握手を交わすだけであった。

その天知を、カメラのフラッシュが追った。鮨屋、そば屋、ヤキトリ屋、ダンゴに汁粉屋といった模擬店の周辺は女たちで埋まっている。その女の群れの中にはいると、一緒に写真をとってくれという注文が乱れ飛んだ。

一時間ほどかかって会場を一巡したとき、天知昌二郎はふと春彦のことを思い出していた。春彦も今日は三つ揃いの背広を着て、この会場に来ているのである。さっきはステージの左端の下に、その姿があった。

天知がステージをおりてからも、春彦はそのあとを追おうともしない。親ひとり子ひとりでも、春彦は相変わらず甘えることを知らないのだ。ひとりぼっちで時間を過ごすという孤独に、春彦は慣れっこになっているのである。

天知は、ステージのほうへ戻った。このような会場では、五歳の子どもの姿がかえって目立つものだった。ブルーの背広を着て、半ズボンの足に白い靴下をはいている春彦は、ステージの左端の壁際に立っていた。

大きな目を見開いている。色白の顔で、頬がピンク色に染まっていた。大勢の人々が飲み食いをしている会場の雰囲気に、圧倒されているようだった。それでもいつものように、あどけない紳士というポーズは崩れていなかった。

しかし、春彦はどうやら、ひとりではないようである。すぐそばに、春彦と同じくらいの年頃の少女が立っている。その少女の背後にいる女が、春彦にヤキトリの皿をすすめていた。

春彦は少女と一緒に、女から手渡されたヤキトリの皿を受け取った。恐縮してか、礼儀正しく挨拶をしている。女は楽しそうな笑顔で、ヤキトリを食べ始めた春彦と少女を眺めやっていた。

二十七歳になる女であった。二十四、五に見えるが、天知昌二郎はその女の二十七歳という年齢を知っていたのだ。白のシフォンのロング・ドレスを着ている。髪は緩やかなウエーブのかかったセミ・ロングである。

その上品で知的な美貌は、よく知られている。女優の西城富士子であった。

芸名も本名も西城富士子で、女優歴は十年近くになるだろう。高校を卒業すると同時に映画女優となり、女優を続けながら大学を出たのだった。最近では、テレビのドラマによく出演している。

デビューした当時は、大スターになるだろうという評判であった。だが、西城富士子は大スターどころか、スターにもならずじまいだったのだ。最初の頃の二、三本の映画で、主役を演じただけに終わったのである。

それ以後は、脇役の美女を専門に演ずるようになった。テレビに移ってからも、使われ方、役どころが決まってしまっていた。薄倖の人妻、金持ちの夫人、美しくて若い後妻、冷酷な愛人、ヒロインと対決する若い未亡人といった脇役ばかりであった。

その理由は、ひとむかし前の洋画のスターに相通ずる美貌のせいである。チャーミングな美貌は申し分ないのだが、上品で知的すぎるのだ。一般的で平凡な美貌が売れるという時代の風潮に、西城富士子はそぐわなかったのであった。

いわば、西洋の古城に住むお姫さまという美貌では、役どころが定まってしまう。それが、女優としては悪い意味での、強烈な個性になったわけである。そうした女優は、主役には向かなかった。

それに西城富士子は、裕福な家の娘であり育ちもよかった。芸能界ズレをしないし、そのことが彼女から色気を引き出さなかった。堅いのである。堅さが西城富士子の暗い翳りを強調していて、どうしても陰気な女という印象を拭いきれない。

実生活においても、西城富士子は堅かった。この十年間、西城富士子がゴシップやスキャンダルで騒がれたことは、ただの一度もなかった。結婚はもちろん婚約とか恋愛とかで、噂になることすらなかったのである。

華やかさに、欠けている。ゴシップやスキャンダルのタネにならないような女優はスターになれない、という一部の人々の評価を西城富士子は実証して見せた女優のひとりだったのだ。

好きな男が、まったくいなかったとは思えない。ただ西城富士子は好きな相手がいても、それを恋愛という行動にまで発展させなかっただけなのだろう。二十七にな

ったいまでも、恋人はいないようである。
ほかにも、理由があるという噂を聞いた。西城富士子の両親が、恋愛を禁じているというのだ。彼女の両親は、娘が芸能界入りすることに大反対をした。芸能界はふしだらな世界で、良家の子女が出入りするところではない、というのが反対の理由だった。
しかし、西城富士子はどうしても、女優になりたかった。そこで話し合いの結果、条件つきで両親の許しを得ることになった。芸能界およびその関係者との恋愛、結婚はタブーとする。結婚は両親のすすめる相手を選ぶ、という二つの条件だった。
西城富士子は、その条件を守ることを誓約したというのである。
いずれにしても、西城富士子は未だに独身であり、女優を続けている。いまさら主役への野心などないし、脇役としては貴重な存在であった。地味な女優だが、その美貌には多くのファンが魅せられている。爆発的な人気には無縁でも、第一線級の女優として結構売れているのである。

「どうも……」
近づいて、天知昌二郎は手を上げた。
春彦は、知らん顔でヤキトリを食べている。少女がヤキトリの串を横にくわえたままで、天知昌二郎を見上げた。
「今日はどうも、おめでとうございます」
西城富士子が少女を押しのけるようにして前に出ると、白い歯を覗かせてから丁寧に頭を下げた。西城富士子は天知がここへくるものと察して、待ち受けていたようだった。
「ありがとうございます」
天知昌二郎には、西城富士子の上品で知的な笑顔がまぶしかった。本物の美貌だと、彼は改めて思った。西城富士子という女優は、天知にとって好みのタイプだったのだ。
「義理の妹という言い方は変なんですけど、これがサツキなんですよ」
西城富士子が、少女の頭を軽く撫で回した。
「こんにちは……」
サツキという少女が、気どった笑顔になって挨拶をし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。小柄で、フランス人形のような顔をしている。可愛らしい美貌のせいか、大人っぽい感じだった。早熟で無邪気、可憐でオシャマな女の子である。
「いくつかな」
天知は、少女に笑いかけた。
「六つです」
サツキという少女が、大きな目をくるりと回して答えた。
「美少女ですね」
天知は、西城富士子に言った。
「さあ、どうでしょう」
西城富士子は、サツキの水色のドレスのまくれている裾を引っ張った。
「六つというと、うちの坊主より一つうえですか」
天知はサツキと、澄ました顔でいる春彦を見比べた。
「そうですね。春彦ちゃんのほうが、背が高いけど……」
西城富士子は、少年と少女を正面から見るために、天知昌二郎の隣りへ足を運んで来た。ロング・ドレスが揺れて、全体的に流れているプリーツが動き、彼女のボディ・ラインを描き出した。
「あなたに、よく似ているみたいですね」
「サツキがですか」
「ええ」
「みなさんに、そう言われますの」
「母娘(おやこ)みたいですよ」
「そう間違えられることもあるんです」
「隠し子ですか」
「事情を知っている方たちは、隠し子だろうなんて冷やかすんですよ」
「あなたが二十一のときの子どもってことになるから、年の点でもおかしくはないでしょう」
「いやですわ。天知さんまで。そんなことをおっしゃって……」
「しかし、血はまったく繋(つな)がっていないのに、そっくり似てしまうなんて不思議みたいだ」
「わたくしも、ふっと錯覚するときがあるんです。サツキがわたくしのことを、ママって呼ぶでしょ。その瞬間、この子はわたくしの娘じゃないのかしらって、ふっと思ったりするんです」
「ママって呼ばれたりすれば、なおさらでしょうね」

「サツキは本気でわたくしのことをママだと思っているらしいし、わたくしも実の娘みたいに可愛がっているでしょ。だから、何となく妙な気がして……」

西城富士子は、照れ臭そうに笑った。

西城富士子の父親は西城豊士、母親は若子という。西城豊士は六十歳、若子は五十四歳になっている。だが、西城夫妻は富士子の実の両親ではなく、養父母ということになるのである。

西城夫妻は結婚して十五年も、子どもができなかった。それで西城豊士が四十一、若子が三十五のときに、養子をもらうことにした。たまたま西城豊士の親友が事故死を遂げたことから、その娘を養女に迎えようと話がまとまったのである。

そのとき、養女に迎えられたのが富士子だったのだ。富士子は当時、八歳であった。そのまま十三年がすぎて、西城豊士が五十四、若子が四十八、富士子は二十一とそれぞれ年をとった。

その前の年の秋口に、結婚して二十七年ぶりに、若子が妊娠したのである。驚きと喜びと苦悩が、西城夫妻を襲った。何としてでも実の子が欲しい、だがあまり例のない高年齢の初産ということになるし、孫みたいな子どもでは将来が不安だと、西城夫妻は迷いに迷ったのだった。

しかし、三カ月、五カ月となっても胎児は順調だということから、西城夫妻はついに生む決心をした。西城豊士の勤務先である大学の医学部の付属病院で、教授が責任を持って出産を成功させるということになったのである。

ただし、通常分娩ではなく、帝王切開による出産だった。すべてが、うまくいった。予定日に生まれることになったし、帝王切開手術にも障害はなかった。生まれたのは女児で、体重が標準を下回っていたが、健康そのものであった。

母体にも、異常はなかった。若子は四十八歳にして、初めて母親になったのだ。西城夫妻は実のわが子を得て、手放しでの喜びようであった。五月に生まれたことから、わが子にサツキという名前をつけた。

富士子には、二十一も違う妹ができた。戸籍上は姉妹だが、富士子とサツキは赤の他人であった。それで富士子はサツキのことを、義理の妹だなどと、妙な言い方で

紹介したのである。
西城夫妻は、サツキが可愛くて仕方がない。しかし、世間に対しては恥ずかしさが先に立つし、当のサツキにも親としての面映ゆさがある。四十八の恥かきっ子と、むかしから言われている。数え年と満年齢の差を考えると、なおさら恥ずかしい。
それで西城夫妻はサツキに自分たちのことを、おじいちゃま、おばあちゃまと呼ばせた。サツキはいつの間にか、富士子のことをママと呼ぶようになっていた。サツキが幼稚園にはいってからは、富士子が対世間的に母親役を務めるようになった。
サツキは西城夫妻に、孫として甘え、懐(なつ)いていた。富士子には、母親としてのあらゆる要素を求めた。富士子のほうにも情が湧き、母性愛を刺激される。時間が許す限り、富士子はサツキと一緒にいて、母親らしく振る舞ってやる。
サツキもいまでは本気で、富士子を母親と思っている。富士子もサツキが自分の娘みたいに、錯覚することがある。それは、当然の結果と言えるかもしれない。サツキがもう少し成長すれば、富士子との仮りの母娘関係も解消されることだろう。
そう考えれば気が楽だし、西城富士子もいまはサツキとの不思議な間柄を楽しんでいるようである。西城夫妻も祖父と祖母の心境にあって、サツキの母親役を富士子に任せっきりらしい。
「ママ……」
サツキが西城富士子の手に、ヤキトリの皿を押しつけた。
「はい」
極めて自然に応じて皿を受け取り、西城富士子は代わりにハンカチをサツキに渡した。傍目(はため)には間違いなく、母娘に見える二人であった。無意識のうちに、母と娘になりきっているのだ。
天知は、美少女の顔を見守った。サツキは富士子に凭(もた)れかかるようにして、ハンカチで口のまわりを拭いている。富士子を振り仰ぐサツキの目も、サツキを見おろす富士子の目も、ともに笑っている。
西城富士子がゴシップやスキャンダルに無縁であり、恋愛にも結婚にも無関心でいられる理由の一つに、サツキの存在ということがあるのではないかと、天知は思っ

た。西城富士子は、サツキの母親でいたいのかもしれない。

サツキについては、話だけをよく聞かされていた。だが、サツキと対面したのは、今夜が初めてである。西城富士子とサツキが一緒のところを初めて見て、天知はその意気の合った模擬母親ぶりに驚かされたのであった。

「あなたの結婚は、いったいどうなるんでしょうかね」

天知は、髪の毛をかき上げた。

「え……？」

その瞬間に、西城富士子の顔から笑いが消えていた。西城富士子は、目を伏せた。彼女特有の暗い翳りが、顔に広がった。深刻に考え込み、明らかに困惑の表情を示しているのである。

「どうかしましたか」

おやっと思うくらい強い相手の反応に、天知のほうも戸惑っていた。

「実は今夜、天知さんにお会いしたら、そのことでお話ししようと思っていたんです」

沈みきった顔で西城富士子は、形のいい唇を重そうに動かした。

2

天知昌二郎はさっきから、自分に向けられている視線を感じ取っていた。いや、天知だけを見ているのではない。その男は天知と西城富士子に、視線を投げかけているのである。

天知にとっては、知りすぎているほどよく知っている男であった。『婦人自身』の編集長、田部井浩三（たべいこうぞう）である。田部井と天知は、仕事のうえで密接な関係にあり、付き合いも古く、ツーカーの仲だった。

天知のことなら田部井に訊けと、この世界では言われているくらいであった。田部井の頼みなら、大抵のことは引き受ける天知である。また田部井は常に、天知のよき協力者だった。

天知昌二郎には友人が少ないが、田部井に限り親友と言ってもいいだろう。天知の住まいにも遠慮なく出入りして、プライベートなことに首を突っ込んだりする他人は、この田部井浩三しかいないのである。

田部井浩三が、パーティ会場に姿を見せているのは当

然であった。だが、その田部井が素直に近づいてこようとしないのは、どう考えても不自然だった。少し離れたところにいて、天知たちを見守っているというのは、およそ田部井らしくなかった。

田部井はもちろん、西城富士子のこともよく知っている。女性週刊誌の編集長だし、芸能界には顔が広かった。天知よりも田部井のほうが、西城富士子とは古くから親しい間柄にあるはずだった。

それなのに、田部井編集長は妙に遠慮しているのである。あるいは話が途切れたときに、天知か西城富士子のどちらかが自分に気づくのを、田部井は心待ちにしていたのかもしれない。

いずれにしても妙な遠慮をされると、天知のほうも素直に声をかけられなくなる。天知は田部井の存在に気づいていながら、あえて彼に背を向けたままでいた。天知の肩越しに、田部井の姿が西城富士子の目に映ずることを、期待するほかはなかったのである。

「あら……」

ようやく西城富士子の目が、田部井の姿を捉えたようだった。西城富士子は暗い眼差しのままで、何とか笑顔を作っていた。

「やあ……」

田部井が、大股に近づいて来た。

「どうも、お久しぶりです」

西城富士子が、腰を屈めた。

「しばらくでした。相変わらずお綺麗だし、ご活躍のようで何よりです」

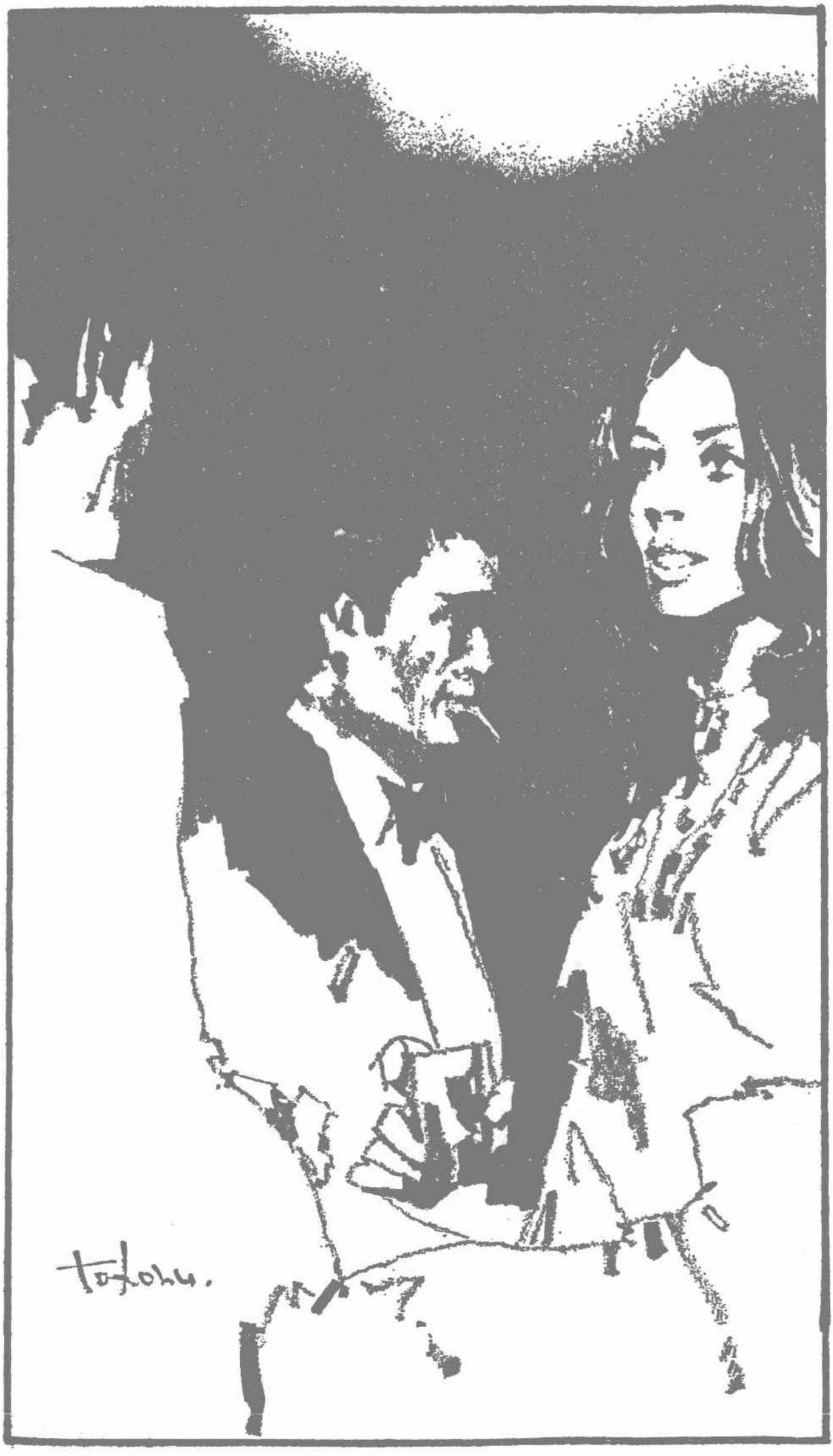
田部井がそう言って、取って付けたように大きな声で笑った。

田部井編集長は天知より二つだけ年上だが、四十半ばぐらいに老けて見えた。額が広くて髪の毛が薄く、強度の近視のメガネをかけているせいかもしれない。小柄で肥満型というのも、天知とは対照的であった。

天知昌二郎は精悍で行動的なインテリという印象と、銀行員のような堅さが一つに溶け合っていて、冷ややかなほど、もの静かな男である。その天知と、陽気なくせにひどく神経質な田部井とが絶妙なコンビを組んでいると、周囲の人々は喝采を送るのだった。

「妙な遠慮をしなさんなよ」

天知が、表情のない顔で言った。



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com